S-face

SFC makes the future through researches

経口抗がん剤治療を受ける患者の新たなケアを探求する

矢ヶ崎 香

×

金原出版株式会社

VOL.
010/100
2016.Mar 発行
和の色：新橋色

服薬を継続しつつ皮膚障害を和らげQOLを高める

がん医療が発展し、日々、新しい治療法が開発されていますが、それらに伴う副作用症状や辛さは、患者にしか分かりません。医療者が客観的・予測的に患者の苦痛を理解するだけではなく、当事者にとってどのような苦痛なのか、その人にとって、その苦痛がどのような意味を持つ体験なのかを患者に聴き、その事象を専門的な見地から理解しなければなりません。矢ヶ崎香准教授の研究は、そのような患者の声に耳を傾け、より質の高いがん看護の実現を目指しています。

経口抗がん剤治療の最近の動向

がんに関する医療は日進月歩であり、臨床で新しい治療が始まると、患者は新しい薬の副作用（副反応）症状や治療の困難さに直面します。私たちは、新しい治療法や薬剤が臨床で使われる場合、できるだけ早く新たなケアの方法を開発しなければなりません。

近年、がん治療において経口抗がん剤の使用頻度が高まっています。その対象は主に再発や転移しているがん患者であることから、服薬期間が長期にわたり治療のゴールが見えにくいという特徴があります。また経口抗がん剤の治療は外来診療のため、患者自身の主体性が問われます。

経口抗がん剤のなかで、がん治療によく使われるものに分子標的治療薬があります。この薬は、がん細胞の特定の分子を標的にして、その機能を制御することで治療をするものです。多くの患者は、点滴で投与する従来の抗がん剤に比べると、経口剤は副作用が少ないと考えがちです。確かに経口で用いる分子標的治療薬は、点滴に比べると服薬時の痛みはありません。しかし副作用については、経口で使う分子標的治療薬も、点滴で用いる従来の抗がん剤や分子標的治療もほぼ同等か、場合によっては経口剤のほうが重い副作用を引き起こすこともあるのです。

皮膚障害に関するケアの向上を目指す

私は今年度から、「経口分子標的治療のがん患者イニシアチブ　皮膚障害予防・管理プログラムの実用性」という研究に取り組んでいます。分子標的治療薬の使用に伴って現れる皮膚障害は、治療の効果と皮膚障害の程度が相関すると言われています。このため皮膚障害の発現は、治療効果の現れでもあるわけです。一方でこうした皮膚障害は、患者の生活の質（Quality Of Life：QOL）を著しく低下させるとともに、場合によっては服薬の中断をもたらす可能性もあります。治療効果のある分子標的治療薬の服薬を継続しつつ、副作用としての皮膚障害を和らげて、患者のQOLを高めることがこの研究の目的です。

研究期間は2018年度までを予定しており、現在は分子標的治療薬を服用している患者が、自身の皮膚障害についてどのようなセルフケアをしているのか、どんな困難さを感じているのかなどについてのインタビューを実施し、それを概念化することで、患者の体験している世界を明らかにすることを目指しています。次いで、皮膚障害の実態に関する前向きコホート研究(※)を実施。その後は、研究結果を元に、皮膚科医師や看護師などの専門職を集めてディスカッションを行い、分子標的治療薬使用に伴う皮膚障害の専門的ケア開発を予定しています。

※対象者が疾病にかかる前に調査を開始する研究

患者の声を発信しその声に応えること

がん治療において分子標的治療薬は、再発や転移の患者に多く使われており、一つひとつの薬が効くか効かないかで、その度に生命予後の岐路に立たされます。皮膚障害をはじめとした副作用によって、効果のある薬の服薬が続けられなくなった場合、それに代わる薬剤があるかどうかなど、患者はたいへん「不確かな状況」に置かれます。このように、皮膚障害によって服薬を中止・中断することは、がん治療という観点からは好ましくないことです。しかし患者のQOL維持という点では、それを否定することはできません。だからこそ、がん治療に効果のある分子標的治療薬が、少しでも長く服薬できるように、皮膚障害をコントロールする必要があるのです。このような観点で考えると、臨床では患者自身の体験がとても重要です。ケアとは、患者の真のニーズに応えるべく提供されるものです。そのために、新しい治療が始まった場合には、まず患者の声を聞くことでしか、ニーズを把握することはできません。つまり、患者と共にケアを作ることが大切なのです。

私たちの使命は、患者の声を世界に発信し、その声に応えるべく新たな研究やケアをしていくことだと、強く確信しています。

研究結果のモデル図

Yagasaki K, Komatsu H. Preconditions for Successful Guideline Implementation: Perceptions of Oncology Nurses. BMC Nursing 2011, 10:23.

研究発表のポスター

Yagasaki K, Komatsu H. The need for a nursing presence in oral chemotherapy. Clin J Oncol Nurs. 2013, 17(5):512-6.

慶應義塾大学信濃町キャンパス・孝養舎（看護医療学部）

がん看護に関する主な取り組み

Development of the Guideline and the Realization of its Effective Utilization

ガイドラインの策定と効果的な活用の実現

化学療法看護やがん看護の研究の一環として、2009年に「外来がん化学療法看護ガイドライン」を開発。その後、臨床でより効果的に活用してもらうため、「がん医療におけるEBNと臨床実践のgapと波及モデルの開発」という研究も行った。

Enhancement of the QOL of Cancer Patients

がん患者のQOL向上

2015年度から「経口分子標的治療のがん患者イニシアチブ 皮膚障害予防・管理プログラムの実用性」という研究をスタート。分子標的治療薬の副作用である皮膚障害を和らげることで服薬を維持させつつ、患者のQOLを高めることを目的としている。

Proactive Nursing Care for Cancer Outpatients

外来がん患者へのはたらきかけ

「自宅で経口化学療法を続ける患者の服薬の実態解明と安全、確実な服薬支援モデル開発」という研究を実施。現在の外来中心のがん治療においては、看護師自身が自ら積極的に経口抗がん剤の治療を受けている患者にはたらきかけ、関わる必要性を明らかにした。

Profile

矢ヶ崎 香

慶應義塾大学看護医療学部准教授。日本赤十字看護大学大学院看護学研究科博士後期課程修了。日本がん看護学会理事。2014年、第9回欧州看護学会ベストポスター賞を受賞。専門はがん看護、化学療法看護など。

詳しくはWebサイトへ

詳細インタビューや動画もご覧いただけます

S-face　検索

慶應義塾大学SFC研究所
慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322
Tel: 0466-49-3436（ダイヤルイン）
E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp